



令和5年9月26日、青森県総合社会教育センターにおきまして、株式会社感性リサーチ代表であり人工知能(AI)研究者でもあり、ベストセラーとなったトリセツシリーズの著者としても有名な黒川伊保子さんをお迎えして、講演をしていただきました。平日にも関わらず、多数の方々にご出席いただき、研修委員会・健全育成委員会を代表して、心から感謝申し上げます。

青森県高P連合同研修会 「息子・娘のトリセツ」

くり本を読む時間もありませんでしたが、研修会にあたり、予習のために「息子・娘のトリセツ」を買い、黒川さんのユーチューブ等も拝見させていただきました。

講演では私たちの日常生活ある話題を脳科学に基づいて分かりやすく、かみ砕いてお話をしてくださいました。



以下私のメモから

・男の子は思春期、13歳を過ぎると、テストステロンという男性ホルモンが分泌され、一気に男性脳仕様になる。闘争心、縄張り意識、独占欲を掻き立て、脳を狩りに駆り立てる。

・女はなぜ、質問にちゃんと答えないのでか(笑)。例えば奥さんが、新しいスカートを買ってきたとします。

男はスペックを確認せずにはいられない!「僕に黙って買ったの?それって新しいよね?」

女性脳には、いきなり侵入するものには警戒スイッチがある。(私も持っています。笑)女は身を守らないわけにはいかない!余計な事をあれこれと言うのではなく、一言「それ、いいね。」とさえ言えば良いそうです。お父さん(笑)。



・娘にとって父親は、この世で一番あり得ない男である。思春期の女性脳では「父親は遺伝的な近さから一番選んではない男」と認識される。よって父親は避けられる。

・自我のリストラ:思春期の女性脳では、自我が肥大して、自分が「脳内の世界」の大部分を占める。ここで自我のリストラをしないと大人になってから周りの視線が気になって苦しむことになってしまう。

・家族の話は、「いいね」か「わかる」で受ける。

・愛を言葉にして伝える。

先生は色々なバージョンのお話をしてくださいました。高校生を持つ父母、教師の皆さん、「いいね。わかるよ。それはつらいね。大変だったね。そうか...そんなことあるんだね。」言えていますか?...

私も日頃の反省をしつつ、楽しい時間を過ごす事ができました。黒川先生、本当にありがとうございました。

(研修委員長 奈良 真弓)

青森県高P連広報紙づくり研修会

「実践『まわしよみ新聞』で学ぶ紙面づくりの「ツ」

6月27日、青森県総合社会教育センターに於いて、編集技量等の向上並びにPTA活動の活性化に資することを目的に「広報紙づくり研修会」が開催され、県内各地より46名が参加しました。受付の隣には、昨年度の広報紙コンクール受賞校の広報紙も展示され、開会前から多くの参加者が熱心に閲覧していました。



研修会では昨年同様に、東奥日報社編集局整理部整理委員 三上朋徳氏みかみ ともとくをお招きし、「実践『まわしよみ新聞』で学ぶ紙面づくりの「ツ」というテーマでお話等をしていただきました。最初に、PTA広報紙を作る目的や伝わりやすい紙面を作るポイント等について教えていただきました。その後、参加者は10テーブルに分かれ、地元紙や他県の新聞から気になる記事を選び、選んだ理由を共有しました。どのテーブルもはじめはお互い緊張している雰囲気でしたが、すぐに打ち解け合い時



間が経つのも忘れ熱中していました。

その後、各自選んだ記事をもとにグループでトップ記事を選出し、タイトルをつけ、一枚の新聞を完成させました。最後にテーブルごとに、自分たちで作った新聞について説明し、講師の先生から講評をいただき研修会は終了しました。

各自が選んだ記事を共有することで、異なる視点からの見方を学び、今後の紙面づくりに生かす素晴らしい経験となりました。

来年度はより一層たくさんの方たちの参加をお待ちしております。



(調査広報委員長 関合 美絵子)

青森県高P連進路指導研修会

「令和5年度進路指導研修会の記録」



11月8日、青森県総合社会教育センターで「令和5年度青森県高等学校PTA連合会進路研修会」が開催されました。

今回は津軽民謡歌手のかすみさんを招き、「私の進路」～日光から津軽へ～という題で講演して頂きました。かすみさんは、栃木県日光市の出身です。どうしても

津軽民謡歌手になりたいという一心で母親と一緒に津軽(旧尾上町)に引っ越し、柏木農業高校に進学しました。津軽に来ることに周囲のほとんどの人は反対したそうですが、母親の「やると決めたなら全力で応援する」という言葉が、かすみさん本人の覚悟をより確かなものにしたようです。

師匠の内弟子生活でも辛いことも多く、人知れず涙を流したこともあったそうです。講演では迫力満点の津軽民謡も披露して頂き、最後にはサプライズで民謡教室の生徒さん(中学3年)の手踊りも交えた「津軽さんさがり」で締められました。津軽の伝統芸能を次世代に伝える活動も行っているとお話にも感銘を覚えました。

かすみさんのように、中学、高校卒業後、子どもが地元を離れていくという家庭は多いと思います。彼女は(栃木の)師匠、



保護者、知人、家族など沢山のひととじっくり相談し、決意が固まったら困難にもめげずに実行して頂きました。そのような姿勢、考え方が大切ではないかと感じました。今回の講演を拝聴し、私も高校生の子どもをもつ親として、子どもの将来の希望にじっくり耳を傾け、本人の覚悟のほどを見定めたら、全力で応援しようという気持ちになりました。

また、今回の研修に参加して、子供たちは我々保護者の他にも学校、地域、支援団体等多くの方々にお世話になっていることを改めて感じました。感謝です。今後もしっかりお願いします。ありがとうございました。(進路対策委員長 長内 俊忠)

青森県高P連第1回単位PTA会長会議



9月22日、十和田市（サン・ロイヤルとわだ）において95名余りの各単P会長並びに渉外主任などの参加のもと、第1回単位PTA会長会議

が開催されました。

開会行事では葛西会長の挨拶の後、会務報告、各委員会報告、五所川原大会会計報告がありました。続いてNPO法人奥入瀬自然観光資源研究会の川村祐一事務局長から「これを知って観るとおもしろい奥入瀬渓流」と題してお話をいただきました。続いて12テーブルの分科会では「今後の高P大会の在り方」について活発な協議がなされ、昨今の生徒数の減少や学校の統廃合などによる開催当番地区と学校の負担が大きいという問題点を今後どのような改善、方向性を見出せるかが論点のポイントとなりました。

以下一部意見をご紹介します。

◆東北大会について
○6年に1回の東北大会はアクセスなどの観点から八戸市や弘前市でも可能ではないか。

◆県大会について
○毎年開催、曜日日程、規模の見直しも必要な時期ではないか。



太田 正幸

（十和田工業高校PTA会長）

○学校数を基にするなど地区再編や近隣地区相互の協力体制を築くことも必要となってくるのでは。
○アトラクションについて学校関係者の負担を考慮すれば録画放送でも可能でないか。
○大会はオンライン、懇親会は対面開催という方法も考えられる。
○講師について限られた予算や題材の発掘に苦慮する現実がある。
来年は上十三地区（十和田大会）での開催が決まっております。時代も変動している中で私たちも対応していかなければなりません。

東北地区高P連福島大会



オープニング 福島県立橘高等学校弓道部



開会行事 役員紹介



講師 気象予報士 斎藤恭紀氏



青森県受賞者

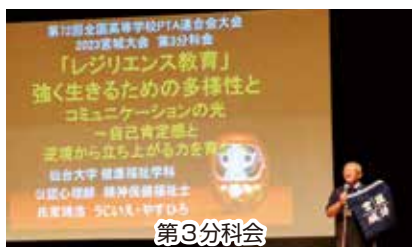


情報交換会鏡開き



研究協議

全国高P連宮城大会



第3分科会



全国副会長の青森県田名部顧問



PTA活動振興功労者表彰受賞柴田一則八工大三高元会長



第5分科会



全体会会場の様子

東北・全国大会記録ダイジェスト

地区協議会だより

東青地区協議会

東青地区協議会 会長 柴田 福幸

令和5年7月20日(木) 東青地区協議会研修委員会研修会が青森高校で開催され、青森高校家庭クラブ員による「青高自炊塾」の実践報告と、青森高校OBでもあり、青森大学客員教授で青森県立保健大学非常勤講師の竹林正樹氏による講演会が行われました。

講演は「ナツデで人を動かす」と題し、心理学に基づいて人をどう動かすか、という内容でした。会社で上司と部下の間に立つ私にとって、大変興味深い講演でした。人を動物の象に例え、あの巨大で本能的で強力な象をどうやって動かすかを考えたとき、下手をすると人は踏み潰されてしまいますが、象に自ら動いてもらうためには餌を与えたり、工夫したりすることが必要です。また、人は健康の大切さを分かっているにも関わらず、なぜ行動をしないのか、というお話から私自身も象なのだと自覚しました。

講演を拝聴し、さまざまなシーンで、私は人々に対してどのように対応すべきなのか、仕事や物事を円滑に進めるために、どうあるべきかを学ばせていただきました。

青森高校家庭クラブ員による「青高自炊塾」の活動は、青森県農林水産部発行の「あおもりの食育」にも掲載されています。活動されている生徒さんの清々しい挨拶からも高校生らしさを感じました。

本日の研修会を準備していただきました青森高校の皆様、講演していただいた竹林正樹氏に感謝申し上げます。また、研修会に参加された皆様に御礼申し上げます。



中南地区協議会

中南地区協議会 会長 羽賀 克順

令和5年1月19日(木) 弘前パークホテルにおいて「中南地区協議会研修会」が行われました。今回の全体テーマは「安心安全な地域再生を創造する力を養うためには」コロナ禍を乗り越えて」と題して行われました。

講師は、陸上自衛隊第39普通科連隊長兼弘前駐屯地司令1等陸佐の天内明弘氏をお迎えして講演をいただきました。講師は、弘前市出身で防衛大学校を卒業後、全国各地での経験やアフリカのジブチで海賊対処行動航空警護隊長を務め、陸上幕僚監部や統合幕僚監部でキャリアを積み、第39普通科連隊長及び弘前駐屯地内にある10個部隊約1,200名の総責任者であります。

自衛隊は国の平和と独立を守るために身をもって責務の完遂に努める唯一の機関であり、自分の命を国家・国民のために捧げる覚悟を持った集団であるということ。一方で、本来自衛隊は目立たない存在であるべきとされています。

具体的な活動として、ジブチ共和国派遣任務のほか、鳥インフルエンザの発生に伴う災害派遣活動、町内の祭り支援などを挙げ、私たちの知らないところで地道な活動をしているということが参加者の心に深く響きました。

今年度は、5月12日(金) 弘前パークホテルにおいて総会を開催し、また新型コロナウイルス感染症が5類へ移行となったことから、数年ぶりに懇親会で意見交換を交わすことができました。今後については、来年1月に研修会を行うこととしており、引き続き中南地区の活性化に努めてまいります。



三八地区協議会

三八地区協議会 会長 河村 泰輔

5月8日(月) より新型コロナウイルス感染症が5類へ移行し、PTA活動も通常の活動が再開されるようになり、三八地区協議会では、9月8日(金) に八戸プラザホテルで研修委員会、健全育成委員会合同研修会を開催しました。

研修会は、ABA青森朝日放送営業局次長兼営業部長、青森県高等学校PTA連合会会長、葛西 孝之氏をお招きして、「PTA新時代変わってもいいんじゃない? あなたの未来がアイデアをつくる」高校生への安全安心を守ろう」と題して講演を頂きました。

講演は、葛西氏の自己紹介から始まり、参加者がグループに分かれて各校のPTA活動の現状と課題を発表してもらい、葛西氏から助言をいただいた後、他県でのPTA活動の取り組み事例を紹介していただきました。また、薬物汚染の危険度が高い大都市では防止活動が活発であるが、薬物汚染から子供を守っていくためにも各家庭内で話し合う機会が必要であることを強調されておりました。終盤では葛西氏がPTA会長をしていたときの事例と、それに対する

他団体・保護者対応のお話を聞き、私共一同、大変参考になりました。

講演時間もあつという間に過ぎ、とても充実した講演会でした。講演で学んだことをこれからの生活や仕事に、さらにPTA活動に活かしていきたいと思えます。



地区協議会だより

西北地区協議会

西北地区協議会 会長 太田 心 生

令和5年10月5日(木) プラザマリユウ五所川原において西北地区協議会研修会が開催されました。研修会には60名の保護者が参加し、講師にメンタルプロコーチ「夢 コーチング RYOMA塾」代表理事の津村 征広氏を招き、「子供たちのやる気を引き出す心のスイッチの入れ方」と題してご講演いただきました。

ご講演では子どもの潜在能力を引き出すルーティン&コーチングとして、ご自身がメンタルコーチを務めている聖愛高校野球部での経験を踏まえ、「メンタルが強い、弱いがあるのか?」という話題から始まり、「ゆるゆる」でも「ガチガチ」でも高いパフォーマンスは出ないこと、未来に希望を持ってチャレンジでき、失敗しても大丈夫な環境がパフォーマンスを高めること、子どもたちにとって安心・安全な場にするために、ルーティンを活用していること等話をされました。また、笑顔でいることが安心につながり心の揺らぎを抑えることや、パワーポーズで子どもたち自身が勇気のスイッチを入れること、呼吸をコントロールすることで集中力が増すことなどを話され、最後は五人一組でお互いに良いところを見つけて伝え合うことの大切さを学ぶロールプレイングを行いました。

研修会では具体的に何をすれば子どもたちのパフォーマンスが向上するのか、子どもたちの心の教育とメンタルヘルスの確保について保護者、教職員のすべきこと等を学ぶ大変有意義な研修会となりました。

結びに、ご講演いただいた津村氏、研修会を企画・運営していただいた五所川原高等学校に心より感謝申し上げますとともに、参加していただいた皆様にお礼申し上げます。



上十三地区協議会

上十三地区協議会 会長 太田 正 幸

11月26日(日) 道の駅「とわだ」にある工房「南部裂織の里」にて、上十三地区協議会健全育成・研修合同委員会研修会が開催されました。コロナ禍を経て本協議会では3年ぶりとなる合同研修会でしたが、加盟各校から参加者を募り、無事に開催することができました。

今年度は青森県の伝統工芸品である「南部裂織」について学び、実際に作品作りを体験することで、SDGsの観点に基づいた地域の伝統文化に触れてもらうことを目的として研修を行いました。

研修では南部裂織保存会の方々のご協力をいただき、参加者全員が機織り機を使ってA4サイズほどの卓布を織り上げました。裂織を織る作業は両手と利き足を順番に使い、腰にも布をピンと張るための紐を回し掛けて行います。手順を覚えるまでが大変で、一枚の作品を織り上げるのに平均1時間ほど掛かります。作品を作り上げた後、参加者の皆さんには大きな達成感が見られました。また、開催セレモニーでは南部裂織保存会会長の小林輝子氏から、会の発足経緯や現在の活動状況などをお話いただきました。通常、体験に行くだけでは聴くことの出来ない貴重なお話に、参加者一同大きく感銘を受けました。

この度の研修会が無事に開催できましたのは、各加盟校からの参加者の皆様と南部裂織保存会の皆様のご協力があったことであり、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



下北むつ地区協議会

下北むつ地区協議会 会長 濱 田 大 臣

下北むつ地区協議会研修会は、例年より遅い時期の実施を計画しております。

第1回研修会は12月14日(木)、はねやホテルを会場に県内出身アーティストGOMAさんのお母様であります弘前医療福祉大学教授 小玉 有子 氏をお招きし、「子育てについて」と題してご講演いただく予定です。

講師の小玉氏は、GOMAさんの成長過程において何度も壁にぶつかり、子育てに相当苦労されたとお伺いしております。しかし、そのような中でも子どものやりたいことを尊重し、応援し続けた結果が現在の活躍につながっているのだと思います。多角的な視点で新たな世界観を見いだし、緻密で独創的な作品を生み出すアーティストGOMAさん。今日に至るまでの道のりについて詳しく拝聴したいと思います。

現在、世の中は加速社会とも言われております。様々な情報が伝わりやすく、常に新しく切り替わっている昨今、子どもたちを取り巻く環境も日々変化し続けています。高校の3年間は子どもが大人として成長するためには大変重要な時間であると同時に、親として子どもとの接し方について悩みの尽きない時間でもあると思います。今回の研修会では、皆様方が抱えている大小の悩みを皆で共有し、問題や課題の解決方法について模索してみたいと考えております。

今後とも学校の枠にとらわれず下北むつ地区協議会一丸となり、PTA活動を活発なものにしていきたいと考えておりますので、皆様方のご理解とご協力をお願いいたします。



歴史に幕

「閉課程を迎えて」

青森工業高等学校 定時制

本校は戦後の次代を担う勤労学生等に高等学校教育の機会均等を実現させるため昭和23年、中心校、蟹田分校、高田分校、今別分校の4校で発足しました。そして昭和26年には後潟分校が設置され、昭和28年には浪館保安隊に中心校の分室として浪館分室が設置されました。後潟分校には昭和29年から昭和46年まで家庭科別科が設置されていました。



その後、幾多の変遷を経て、昭和55年から現在のような中心校1校のかたちとなりました。そして、今年度をもって76年の歴史に幕を降ろします。この間の卒業生は、中心校、分校、分室すべて合わせて2,367名になります。

「希望を胸に」

弘前工業高等学校 定時制

先日、定時制閉課程式典が全日制創立110周年記念式典と合同で行われ、生徒会長から「『定時制』最後」という言葉の重みを実感しています」と話がありました。現在、在籍する2人の生徒は定時制『最後』の青工祭で模擬店の焼

青森県立弘前工業高等学校定時制の課程は、昭和23年に木材工芸課程を設置したことに始まり、令和6年にインテリアコースの生徒が卒業し、75年の歴史に幕を閉じます。

き鳥販売に向けて一生懸命準備をしています。この2人は入学してからの4年間でとても遅くなりました。各々の課題を自分なりに考えて克服してきました。近年の生徒数が少ない状況だからこそできた手厚い指導の賜物ではないかと思っています。2人の生徒を見てみると非常に強くそのことを実感します。2人は十分社会人として通用する力を身に付けました。努力で勝ち取った進路先での活躍が今から楽しみです。

ます。図らずも、木に始まり木に終わる形となりました。これまでの歴史を樹木の年輪と捉え、最後の生徒の手によって閉課程のロゴマークがデザインされました。そこに込められたメッセージは、「定時制課程75年の歴史という切り株に厳然と残る一枚の葉」。これは、最後の卒業生となる自分であり、すべての弘工高定時制卒業生と共に、希望と共に、進もう！というものでした。なぜ、「希望」という言葉が選ばれたのでしょうか。

近年の定時制に入学する生徒は、様々な理由がありますが、ここにしか入学できるところがなかったという消極的な理由の生徒も多いように感じられます。しかし、4年間ゆっくりと時間をかけ、普通科では経験することのできないものづくりに携わり、全日制ではあまりできないアルバイトで社会を学びます。このような環境で自分の可能性を広げ、一人の人間として成長するなかで、定時制に来て良かった、弘工高定時制でなければできなかったという実感を持ち、自分でも大丈夫なのだという自信を胸に社会へと巣立っていきます。そのような先輩方の姿を見続けてきたからこそ、「希望」という言葉を選ぶことができたのだと思います。

「歴史に幕」

八戸工業高等学校 定時制

青森県立八戸工業高等学校定時制の課程は、多くの方に惜しまれながら、令和六年三月をもちまして、設置以来五十五年に渡る歴史に幕を閉じることになりました。

顧みますと本課程は、昭和三十九年に八戸地区が新産業都市に指定されたことを受け、昭和四十二年より業界団体と地域の協力の下、当時八戸市議会議員在任中の中里信男元八戸市長が中心となって八戸市並びに青森県に要望し、中卒就労者養成校として、昭和四十四年に機械工作科と電気工作科が設置されました。その四年後には、機械工作科は機械科に、電気工作科は電気科に科名が変更され、

平成十八年には機械科と電気科が統合され、工業技術科となつて今日に至っています。設置以来、在籍数が百名を超える時代もあり、定時制通信制体育大会での各部の活躍や定時制通信制生徒生活体験発表大会での活躍等、青森県で活躍する定時制高校として、その地位を確立してきました。しかし、少子高齢化の影響もあり生徒数が極端に減少し、令和三年度には青森県立高等学校教育改革推進計画を受け、入学者の募集が停止になりました。近年は職員数が生徒数を上回る状況ではありましたが、全職員がより生徒に寄り添った教育活動に取り組むことができたと思っています。

結びに、これまで皆様から頂戴したご厚情に感謝申し上げますとともに、今後も「学灯拓魂」への思いを胸に、青森県立八戸工業高等学校定時制課程の卒業生五百六十六名をはじめ、ご関係者の皆様の尊い足跡と偉業の数々の歴史が、いつまでも語り継がれることを心より願っています。



「伝える」

弘前高等学校放送局

青森県立弘前高等学校放送局の生徒は先輩から受け継がれてきた技術や精神を大事にして活動しています。練習に使うアナウンス練習帳やテキストは代々受け継がれ、発声の練習は先輩から後輩へ伝えられています。また、大会に向けて行われる校内選考会においては卒業した先輩を招待して、改善点を指摘してもらっています。

コロナ禍では活動の縮小や発声の制限などで、さまざまな難しいこともありました。距離を取ったり、時間の制限をしたり、オンラインを行ったり

しながら活動を続けてきました。日々の活動での主軸は生徒であり、顧問は支援するだけです。

令和5年度は、青森県高等学校放送コンテストにおいて2年ぶりに総合優勝を果たしました。この大会はNHK杯全国高校放送コンテストの予選を兼ねており、7月下旬に東京で全国大会が開かれ、アナウンス部門で優秀賞、ラジオ番組で制作奨励賞を受賞しました。これは生徒が伝え方を日々模索した結果です。このアナウンス部門においては3年連続で決勝進出、上位入賞を果たしています。

話すことは難しいことではありませんが、相手に伝える（伝える）ことは思っている以上に難しいことです。知ってほしいことをしっかりと伝えたいと思ったのに、相手が戸惑っていたり、不思議に思っていたりしているうちは伝わっていません。生徒たちは、伝える技術の向上のための練習だけでなく、一番伝えたいことを明確にし、しっかりと伝える（伝える）ように、考え方を誘導したり、表現を変えたり、撮影したりと試行錯誤を繰り返して原稿や番組の制作活動を行っています。これからのそのような姿を後輩に見せ、伝えて行くことと思います。

（放送局顧問 菅原 孝）

頑張っています 我が部活

「相撲王国復活を目指して」

五所川原農林高等学校 相撲部

本校相撲部は昭和11年の創部以来、87年の歴史と伝統を誇る。これまでインターハイ団体優勝3回を始め多くの全国大会優勝の実績と、出羽の花や富士を代表とする多くの名力士も輩出している。

このように偉大な先輩方の伝統を受け継いだ現在の相撲部はというと、3月に令和4年度全国高等学校相撲選抜大会で本校としては53年ぶり二度目となる団体優勝を果たし、5月には第107回高等学校相撲金沢大会で団体準優勝、8月のインターハイでは団体第3位入賞などの好成績を収め、五農相撲部の名を全国に轟かせてくれた。全国から選手を集めている私立強豪校が揃めく中、本校の

してくれた部員達を心から誇りに思う。

そんな本校相撲部だが、現在の部員数は選手5名とマネージャー1名の合計6名のみ。これは全国の強豪校を見るとダントツに少ない部員数である。しかも選手5人全員が3年生。3年生が卒業してしまうと部の存続が危うい状況なのである。近年、相撲の競技人口が激減し、年々部員の確保が困難になっている。小・中学生の指導者と連携して相撲人口の底辺拡大を図り、それを部員の増加に繋げ、伝統ある五農相撲部の存続と相撲王国の復活を夢見て、今後も尽力していきたい。

（教諭 一戸 拓道）



編集後記

皆様のご協力のおかげで、会報「つながり」を発行できたことを心より感謝申し上げます。コロナ禍での長い制約に耐え、新たな活動の機会を楽しむことができたことに感謝の念が尽きません。PTA活動や学校の頑張りなどを紹介する「つながり」が、各校の絆を深める場としての役割をいくらかでも果たすことができたのなら幸いです。今後も皆様の協力を頼りにより充実した内容を提供し、学校と地域の発展に貢献していけるよう願っています。

今までのご協力に心より感謝いたします。ありがとうございました。

（調査広報委員長 関 合 美絵子）



令和5年度 上半期事業費支出内訳

令和5年4月1日～令和5年9月30日

◆ 事業費 2,730,689円 (予算額 8,501,000円)

- 1 学校安全普及充実事業費 600,000円
- (1) 8月10日 助成金支出 (地区協議会 安全教育活動費) 300,000円
- (2) 8月10日 助成金支出 (青森県高等学校体育連盟) 100,000円
- (3) 8月10日 助成金支出 (青森県高等学校文化連盟) 100,000円
- (4) 8月10日 助成金支出 (青森県高P連安全教育活動費) 100,000円
- 2 共済金等給付事業費 2,074,589円
- (1) 死亡共済金 0件 0円
- (2) 後遺障害共済金 0件 0円
- (3) 負傷共済金 117件 2,024,589円
- (4) 香料 1件 50,000円
- 3 その他事業費 56,100円
- (1) 7月18日 安全互助会だより60号 56,100円

◎ 青森県高等学校安全互助会加入生徒数

全日制24,198名 定時制834名 特別支援学校138名 通信制413名 総数 25,5583名

共済掛金は来年度も同じです。

全日制(専攻科を含む) 600円

定時制・特別支援学校 250円

通信制 100円

令和4年度 負傷種類別データ

(4月～3月支払い分)

負傷共済金支払金額 5,387,762円

支払件数 303件

骨	折	鼻	腰	足首	足	手・腕	顔	鎖骨	その他	件数
		5	4	17	26	50	4	5	4	115
捻	挫	肩	足	手・腕	その他					8
		6	1	1						
脱	臼	肩	膝	手・腕	足					22
		12	3	2	5					
打撲・挫傷		目	鼻	口	足	腰	手・腕	頭	その他	20
					5	1	3	7	4	
創傷		6								6
靱帯損傷・断裂		膝	肘	手・腕	足					79
		63	4	1	11					
半月板損傷・断裂		44								44
腱損傷・断裂		指	アキレス腱	その他						1
			1							
歯牙破損		2								2
その他負傷		41	ヘルニア							47
			6							
										344